

2010. 6. 24 H-56

しる

健康のページ

立花隆 1940年、長崎県生まれ。東大仏文科卒。東大、立教大特任教授。著書に「田中角栄研究」「脳死」など。

「人間はがんから逃れられない」と話す立花さん(東京・文京区、立花隆事務所で)＝松田賢一撮影

評論家・ジャーナリストの立花隆さんは2007年、膀胱がんで手術を受けた。がん研究の最前線に迫るテレビ番組を手がけてもいる。がんとどう向き合うかを聞いた。(田中秀一)

「がん」と向き合う

——がんは日本人の関心が最も高い病気だと思えます。立花さんも、がんに関する仕事をしていますね。僕は心臓病でカテーテル治療を受けていて、命に関するリスクで言うと、心臓の方が高い。それに比べると、がんはどうってことありません。がんに関心があるのは、面白い病気だからです。がんは複雑な病気、研究が進むほど、発生や転移の過程に分からないことがたくさんあると分かってきました。

——がんは怖いというイメージが強いですが、がんの本質を考えると、生きるごとく体が、がんを育てていることです。人間は、がんから逃れることができません。

しかし、医師にも「死に

死の受容 時間にゆとり



「複雑な病気」高い関心

方を選べるなら、がんがいい」という人がかなりいます。ボタンと倒れるわけではなく、ゆっくり進みますから。本人も周囲も、死に向かっていくのを受容するゆとりがある病気です。日本では痛みの治療が不十分でしたが、緩和ケアをきちんとすれば、末期でもそれほど苦しまずに済みます。

——抗がん剤などによる治療が進歩していると言われていますが、抗がん剤の一つに、分子標的薬があります。がんが

——「あなたに有効な治療はない」と言われると、希望を失う患者が多い。治療を受けることだけが希望ですか。

それは患者個人の世界観によって違います。ただ、人間の命は有限であることを踏まえる必要がある。

肉体的にがんを勝てなかったとしても、がんは敗北しなかった人はたくさんいます。ニュートリノの観測でノーベル賞に最も近いと言われた物理学者で、一昨年、大腸がんで亡くなった戸塚洋二さんは、見事な闘病記を残しました。「私にとって早い死といっても、健康者と比べて10年から20年の違いではないか。みなと一緒に、恐れることはない」と書いています。

——立花さんは、がんになって生活や仕事の面で変わった点がありますか。たいして変わっていません。人生の残り時間を考えることはありますが、それは年齢が古希ですから。体も頭も下り坂にある。がんは、その表れの一つです。(医療サイト「ヨミドクタ」に詳細を掲載)

立花さんのがん体験

2007年11月、取材で超音波検査を受け、膀胱にポリープ状の病変が見つかった。翌月、血尿が出て、内視鏡検査の結果、がんと分かり、膀胱を温存する手術を受けた。転移はなく、定期検査を続けている。